

信田和幸（中学校課程・保健体育専攻）

〔序論〕 研究動機・目的・方法

今日、あらゆる教育現場において様々な球技種目を取り入れられているが、そこには一貫した指導方法論はなく、指導者の経験論だけにに基づく指導が中心となっている場合が多いと思われる。

本研究では、ドイツ語圏の球技の一般的捉え方と指導原理を明らかにしながら、球技の指導方法を検討しようとするものである。

〔本論〕 第1章 球技論の視点

とりわけHugo Döbler によって球技論の研究領域が明らかにされた。彼の球技論に基づく、「球技論」とは、スポーツ科学の一分野として認められている球技の本質と機能を明らかにしたものであり、各球技種目において一般的に共通する諸要因や諸特性を考察してまとめ、理論や実践から得た経験を体系立てたものと定義づけることができる。

また、球技論における問題性として、日本に球技の一般理論が存在しないこと、球技の指導が依然として経験論だけに基いて実践されていることが多いことが指摘できた。

第2章 球技（ボールゲーム）の捉え方

ここではドイツ語圏と日本語圏の球技の捉え方を比較した。特にドイツ語圏を中心に、Ⅰ球技の一般的捉え方、Ⅱ球技の捉え方（ドイツ語圏を中心に）、Ⅲ球技の分類と特性、Ⅳ球技における戦術の四つの観点から球技の捉え方を明らかにした。ドイツ語圏と日本語圏の両方において共通して試みているように、球技の体系化を確立していくためには、まず球技の特性を捉えることが必要である。その上で、分類原理を打ち立て、球技が分類されることになる。

第3章 球技の指導方法について

前川峰雄の指導方法論を基に、球技の指導方法論について考察した。球技を指導するためには、理論と実践の両方の立場から球技を捉えなければならない。この理論と実践の結びつきが、指導方法論の基礎になるといえる。「球技の指導方法論」について簡単にまとめてみる。

(1)理論と実践の両方の立場から球技の指導方法を捉えること。

(2)理論と実践の結びつきを通して得た見解や認識を個々の球技種目だけにとどめることなく、他の球技種目にも適応できるか検討すること。

(3)他の球技種目との横のつながりを基に考察し一般化した理論を具体化し、系統立てること。

(4)国内外の球技論や球技の指導方法論に関する情報を収集すること。

また、球技の指導方法上の問題性としては、各球技種目間の横のつながりがないことと指導に系統性が足りないことが挙げられ、わが国に球技の一般理論がないことの裏付けとなった。

第4章 ハンドボールの指導法に関する球技論的示唆

球技論的立場からハンドボールを例に挙げて、技術、戦術、ゲームの三つの観点から実際に球技の指導方法について検討した。運動の系統的指導に当たる技術と戦術の指導は、平行して進められなくてはならない。そして、簡単なものから複雑なものへと段階的に指導することが必要である。

また、ゲームの系統的指導では、ゲームを行うことによって生じる予測的、不測的対応能力を、やはりゲームを通して身に付けるように指導することが効果的である。例えば、ドイツ語圏で実施されている「リードアップゲーム→リードアップスポーツゲーム→正規のゲーム」という配列でハンドボールを指導するとすれば、予測的、不測的対応能力は、「リードアップスポーツゲーム→正規のゲーム」の段階を反復練習することで養うことができると考えられる。ゲームの系統→運動の系統→ゲームの系統というフィードバックが、球技の指導には欠かせない。

〔結論〕

球技の指導方法において注意しなければならないことは、理論と実践の結びつきを密にし、球技種目間の横のつながりを基に一般化した理論を具体化し、系統立てて捉えることである。

そして、実際に指導するにあたっては、運動の系統とゲームの系統の関わりを捉えることが重要な要素となる。運動の系統的指導では、ゲームでの予測的、不測的対応能力を身に付けることが難しく、逆にゲームの系統的指導では、そこにおいて未熟な技術や戦術を補う必要がある。したがって、球技を系統的に指導するためには、運動の系統的指導とゲームの系統的指導の密接な関係を作り上げて、指導していかななくてはならない。

今後の課題としては、実践することによって自分の経験財を整理していくことである。（文献省略）